

研究課題：イエイツとブランクーシ：イエイツのモダン・アート受容

アングロ・アイリッシュの代表的詩人である W. B. イェイツの“Sailing to Byzantium”における“... such a form as Grecian goldsmiths make / Of hammered gold and gold enameling / To keep a drowsy Emperor awake; / Or set upon a golden bough to sing / ...”、さらに“Byzantium”の第三連に見られる“Miracle, bird or golden handiwork, / More miracle than bird or handiwork, / Planted on the starlit golden bough, / Can like the cocks of Hades crow,”において言及されている黄金の鳥には、『黄金の鳥』や『空間の鳥』の制作者である彫刻家ブランクーシからの影響があるのかもしれない。このような発想から始まった研究であるが、結論を先に述べれば、影響の確証は今のところ得られていない。

そもそもイェイツがブランクーシに直接言及している文章そのものが極めて僅少である。公刊されている作品や手紙（手紙に関しては 2024 年現在で進められている全集の進展が待望される）の中では、*A Vision* (1925, 1937) という散文作品にブランクーシの名前が認められるだけである。他方、ブランクーシは、対象がイェイツに限らず、他の芸術家や作品について語ることの極めて少ない芸術家として知られている。結果的に、当然のことながら、イェイツとブランクーシの直接の影響関係に関する研究は非常に少ない。貴重な例外が Jack Quin の“W. B. Yeats and the Sculpture of Brancusi” (2017, *International Yeats Studies*: vol. 2-1) と、同じく Jack Quin の *W. B. Yeats and the Language of Sculpture* (Oxford UP, 2022) であるが、これらの論考においても両者の直接的な影響関係が明らかにされているわけではなく、ましてはイェイツの「黄金の鳥」のモチーフとブランクーシの『黄金の鳥』の共通点が言及されているわけではない。

イェイツとブランクーシには共通の友人が多く、エズラ・パウンドとジョン・クウィンはブランクーシの熱烈な支持者であった。また、事実としてイェイツはブランクーシの作品に頻繁に接しており、ブランクーシの存在とその作品は熟知していたはずである。が、その抽象的造形に戸惑いを隠せなかったようだという妻の述懐が残されている。さらにはブランクーシに対する友人パウンドの高い評価に対してもイェイツは異議を唱えているので、イェイツはブランクーシの芸術から距離を取っていたと考える方が合理的なのかもしれない。

しかしながら、比較対象にしている両者の作品の制作年代が共に 1920 年代であり、イェイツがオカルト的思想に深く親しんでいた事実、一方ブランクーシには（ネオ）プラトニズムの傾向（イデア的なものへの志向）が顕著に認められる上に、ルーマニアの伝承民話を素材に用いている事実を並べ、さらには両者のモチーフが卵（宇宙卵）と鳥であることを重ねてみると、両者の類似性にはどうしても看過できないものがある。こうした類似性は単なる偶然というよりも、イェイツとブランクーシの発想の源に、世紀末から 20 世紀初頭にかけてヨーロッパを席捲した秘教的思想が共通に横たわっていると考えることも十分に可能である。

ブランクーシとオカルティズムの関係を探るには他の専門家による研究を頼るしかないが、鳥の表象に注目したこの研究を通してイェイツの作品への理解が深まったこと（ex. 鳥と卵が本質的には同一である、等）は大きな成果であった。当面はイェイツ作品における鳥の表象について研究を深める予定である。